

# 日本語話者のモノの認識と類別詞

濱 田 英 人・井 上 紗葉璃

## 0. はじめに

言語は情報伝達的手段であるばかりでなく、人間の認知活動の重要な一部であることは言うまでもない。人間が世界をどのように認識するかということはその世界をどのように切り分けているかということであり、そこには当然人間の認知操作が深く関わっているわけである。つまり、人間は人間として固有に有している基本的な認知能力によって能動的に世界と関わりをもっているのである。この人間の基本的な認知能力にはどのようなものがあるのかは議論の必要があるが、少なくともこの「世界の切り分け」という認知操作を考えてみると「複数のモノをその類似性に基づいてグループ化する能力」、つまり、カテゴリー化する能力を挙げることができる。このカテゴリー化の重要性についてはすでに Lakoff(1987)でも次のように述べられている。

- (1) Categorization is not a matter to be taken highly. There is nothing more basic than categorization to our thought, perception, action, and speech. Every time we see something as a *kind* of thing, for example, a tree, we are categorizing. Whenever we reason about *kinds* of things — chairs, nations, illnesses, emotions, any kind of thing at all — we are employing categories.

(Lakoff 1987: 5-6)

そして、このカテゴリー化ということを本稿で考察の対象とする類別詞の視

点から考えると、それはモノをどのように認識するかということであり、その中にどのような類似性を見出し、グループ化するかということである。このモノを通しての世界の切り分け方を言語から見てみると、身近な例としては「可算名詞と不可算名詞(物質名詞)」の区別や「男性名詞、女性名詞、中性名詞」という文法的性の区別を挙げることができる。しかし、小稿で分析の対象とする日本語ではこのような「可算／不可算」の対立、あるいは「男性／女性／中性」という対立としてモノの世界を切り分けるのではなく、他の東南アジアや東アジアの言語と同様に類別詞を用いることで世界を切り分けていることは良く知られている。具体的に言えば、日本語の類別詞は「本」「匹」「頭」「台」などが数詞に付加されることから数詞類別詞(numeral classifier)と呼ばれており、基本的にその指示領域が(2)に示されるように「人間、動物、無生物」で区別されている。

## (2) 類別詞の指示領域

- (a) 人間に使われるもの —— 「人」「名」「方」
- (b) 動物に使われるもの —— 「匹」「羽」「頭」「尾」
- (c) 無生物に使われるもの —— 「つ」「個」「本」「枚」「粒」「台」「冊」

また、日本語の類別詞で興味深いのは、その使われ方としては(3a-b)に示されるように名詞の前に置かれる場合と名詞の後に同格的に置かれる場合があり、前者の場合には「の」格が言語化されるが、後者では現れないという特徴があるということである。

## (3) a. 二匹の犬

### b. 犬二匹

小稿では日本語の数詞類別詞が日本語話者のどのような認知操作を反映しているのかを中村(2004, 2009)の主張する認知モードの視点から考察することで

この認知操作の本質に迫り、また、それが英語等の言語とどのように異なっているのかを明らかにする。

## 1. 日本語話者のモノの認識と類別詞

言語が人間の認識作用を反映していることはすべに述べた。そこでこの節では、井上(1998)の以下の主張を出発点として、日本語のように類別詞を用いる言語と英語のように類別詞をあまり用いない言語についてそれぞれの母語話者の世界の切り取り方の違いについて考えてみる。

- (4) 注目すべき点は、このような助数詞を持つ言語の場合、名詞の意味が英語でいう物質名詞と似ていて、その名詞だけでははっきりとした形がイメージしにくいということである。なぜなら、そうした名詞が示す意味は、それ自体は形もなくはっきりとした輪郭もない素材であって、助数詞を付帯して初めて個々を区別することになるからだ、とフォーリーは説明している。この説でいくと、各言語を話す人の頭の中ではこんなことが起きていると仮定できる。まず、英語で"book"という時にはそのものを個別の物体と捉えているが、日本語で「本」という時は、英語で"water"という時と同じように、それが他から切り離された物体ではなく、漠然とした「本というもの」、「本という性質を持ったもの」、あるいはその名称で表される概念のようなものを思い浮かべる。そしてそれを「一冊」と助数詞をつけて数えることによって初めて物体として認識する、という具合である。

それは要するに、英語のような可算名詞と物質名詞に切り分ける言語表現がある言語と、日本語のように物質名詞のみの言語では、それぞれの話者が自分の身の回りのモノをどうとらえるか、その捉え方が違ってしまっているということを意味する。

（井上 1998: 146-147）

ここで問題としたいことは、日本語のように「可算名詞・不可算名詞」を区別しない言語ではその母語話者はモノと物質の本質的な違いを理解できないという主張である。しかし、この問題に関係して、今井(2010)は日本人とアメリカ人を被験者として可算名詞と物質名詞の認識の違いを調査し、その結果を次のように述べている。

- (5) これらの結果から何が言えるのだろうか。まず、日本語話者がモノと物質の本質的な違いを理解せず、世界に存在するすべての対象を物質として認識するというような極端な言語相対性はないといえる。日本語話者も、モノに対しては形と機能が同じモノ、物質に対しては、形は違っていても同じ物質のかげら（あるいは一部）を「同じ種類のもの」と判断したからである。

（今井 2010: 72）

この両者の主張は認知言語学の視点から捉え直してみると非常に興味深いものと言える。というのは、日本語話者も英語話者と同様に 'book' と 'water' が本質的に違うモノであるとう認識は認知レベルではあるが、それを言語化する段階で両言語に違いが見られるということであると考えられるからである。具体的に言えば、英語話者の場合には「可算名詞」と「不可算名詞」を区別し、前者に属するモノが複数ある場合にはその名詞に複数語尾を付加する。そして、この点では確かに(6a-b)のように英語の可算名詞は複数では複数語尾が付加されるが、日本語ではそうではない。しかし、だからと言って、日本語話者が「本」を物質名詞（不可算名詞）として認識しているかというところではなく、認識のレベルでは「複数の本」という認識はあり、形態論的に複数を表す形態素が付加されていないだけであるということである。

- (6) a. This library has many historically valuable books.

b. この図書館には沢山の歴史的に重要な本がある。

この点で興味深いのは次の(7a-b)のデータであり、実際に池に沢山の魚がいる状況を表現したこの英語と日本語を観察してみると、どちらの言語でも複数語尾は付加されないという事実である。

(7) a. There are a lot of fish in the pond.

b. 池に沢山の魚がいる。

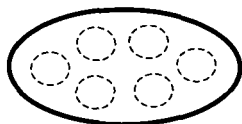
つまり、英語では 'fish' は「可算名詞」であるが、その複数を表示するのに通常使われる複数語尾は付加されない。<sup>1</sup> 認知レベルでは 'book' も 'fish' も、また、「本」も「魚」も一定の形をもち、境界を有する実体(bounded entity)であり、個体として認識されている点では同じである。従って、このことから英語の 'fish' の複数形態素はゼロ形態であると言えるわけであるが、これは日本語の可算名詞の複数は常にゼロ形態であると考え、両者には何らかの共通の認知操作があると考えてよいように思われる。結論的にはこのことは、山梨(2000)が主張している「統合的」認知と「離散的」認知の違いであると考え、ことも可能であり、このことについて山梨は以下のように述べている。

(8) われわれが外部世界を理解する場合、ある対象を、その構成メンバーからなる複数の存在として把握する場合と、統合された単一的な存在として把握する場合が考えられる。例えば、あるチームを対象として理解する場合、そのチームを一つの統合的な存在として把握し、その統一体を前景化して理解することも可能であるが、そのチームを構成する個々のメンバーに焦点をあて、このメンバーを前景化して理解することも可能である。

—中略—

<sup>1</sup> 'deer,' 'sheep,' 'swine'等の不変複数は OE の時代からあり、そのほとんどが強変化中性名詞で、これらの名詞が複数になかった理由として通例狩りの獲物(game)として集合的にとらえられているためであると安藤(2002: 45)は述べている。

(a) <統合的スキーマ>



(b) <離散的スキーマ>

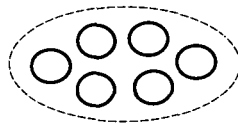


Figure 1

次にみられるような、いわゆる集合名詞の用法の単数と複数のちがいも、基本的には、<統合的スキーマ>と<離散的スキーマ>の認知作用の違いとして理解することができる。

(i) a. There was a large audience in the theater.

b. The audience were deeply impressed.

(山梨 2000: 76-77)

ここで、指示対象を<統合的スキーマ>で把握するか<離散的スキーマ>で把握するかは概念化者がその対象を把握する際の認知操作に因るのであり、どちらのスキーマで把握することも可能であることは(i a-b)が示す通りである。そこで、このことを英語話者と日本語話者に当てはめてみると、英語話者は解釈(construal)に応じてどちらのスキーマも活性化して対象を把握することができるのに対して、日本語話者の場合は<統合的スキーマ>による把握の仕方が比較的固定化しているということである。そのため英語の可算名詞に対応する対象物の集合を認識する場合に概念的には複数認識はなされていても、<統合的スキーマ>でそれを把握するので、複数を表示する形態素が発達しなかったと考えることもできるわけである。

しかし、ここで反省的に考えてみると、確かに日本語の名詞は複数が常にゼロ形態で表示されるのかという点必ずしもそうではない。(9)に示されるように使用範囲はかなり限定されており、人間について言う場合がほとんどであるが、「達」「等」「方」がそうである。

(9) 私／私達、彼／彼等、先生／先生方

また、(10)に示されるように、モノに使われる複数の表示方法として「音の重複」という表現方法もある。

(10) 山山、家家、木木、峰峰、花花

このような表現の認知メカニズムについては、更に研究を深めることが必要であるが、日本語の大きな特徴として、ほとんどの場合名詞の複数の表示方法がゼロ形態で表示されることに変わりはない。

そこで、日本語話者のモノの認識が基本的に＜統合的スキーマ＞によるとすると、この考え方を更に推し進めることで、日本語が類別詞の豊かな言語である理由の一端を見ることができるようになる。この点で、今井(2010)が次のように述べているは非常に興味深い。

(11) 日本語では、モノを数える文脈でしか助数詞が使われないのに対して、中国語の助数詞は、冠詞および指示詞のような働きをするのである。具体的にいうと、日本語では「このネコ」の場合など、ネコ一般ではなく特定のネコのことを指示する場合でも、数といっしょでなければ助数詞は使わない。そして、特に数について言及する必要がない場合には、数自体を言わない。それに対して中国語は、「このネコ」のように名詞を限定的に用いるとき、「一只（小動物に対する助数詞）猫」のように、数と助数詞を用いる。

（今井 2010: 78）

つまり、日本語ではモノを数える場合にのみ類別詞が必要なわけであり、従って、この「数える」という認知プロセスの過程で日本語話者の認知操作として類別詞が必要なわけである。言い換えると、日本語話者の複数のモノの認識が

基本的に＜統合的スキーマ＞による認知であり、そのためその成員を焦点化しその数を問題にしようとする、必然的にある種の認知操作が必要であり、その言語的な現れが類別詞であると考えは全く自然である。<sup>2</sup>

そしてこのように日本語話者がモノを＜統合的スキーマ＞認知をするのが基本であるとする、このことが概念化者の事態認識の仕方と深く関係していることは言うまでもない。そこで次節では中村(2004, 2009)の主張する2つの認知モードについて概観し、その視点から＜統合的スキーマ＞と＜離散的スキーマ＞という認知のあり様について考えてみる。

## 2. 中村(2004, 2009)の認知モード：IモードとDモード

中村(2004, 2009)は「言語の本質は我々認知主体が何らかの対象との主客未分の直接的な身体的インタラクションを通して認知像を形成しているということであり、その一方で我々はこの認知の場から外に出て認知像を客観的事実としてメタ言語的に認識することもできることにある」と主張している。つまり、本来的には対象との身体的インタラクションによって得られた認知像をメタ認知する(客体視する)ことで、対象を客体として認識するということである。中村はこの2つの認知の仕方をIモード認知(Interactional mode of cognition)とDモード認知(Displaced mode of cognition)と呼び、日本語が前者を強く反映した言語であるのに対して、英語は後者を強く反映した言語であることを多くの言語現象を対照させて論じている。

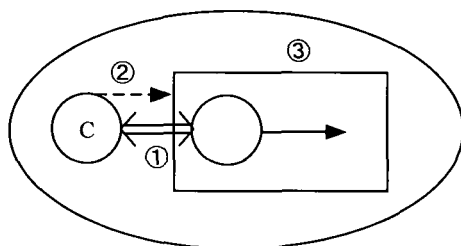
具体的には、Iモードとは図2のように概念化者が①の両向きの矢印で示されるように記述対象と身体的インタラクションをもち②の破線矢印で示される認知能力や認知プロセスによって対象を捉え③の認知像を構築する認知の仕

<sup>2</sup> この点で英語の場合にはモノの集合を＜統合的スキーマ＞で認識するか、＜離散的スキーマ＞で認識するかには柔軟性があり、そのため、(i)のように＜統合的スキーマ＞で認識されたモノを複数形の代名詞で呼応することが可能である。

(i) John returned from *the police* yesterday. He said *they* treated him like a child.  
(山梨 2000: 78)



方であり、それに対してDモードとは図3のように認知主体としての我々が記述対象とインタラクションしながら対象を捉えていること（認知像を構築していること）を忘れて、認知の場（楕円）から外に出て(displaced)、認知像を客観的に眺めているように捉える認知の仕方である。



外側の楕円：認知の場 (domain of cognition)

C: Conceptualizer (認知主体)

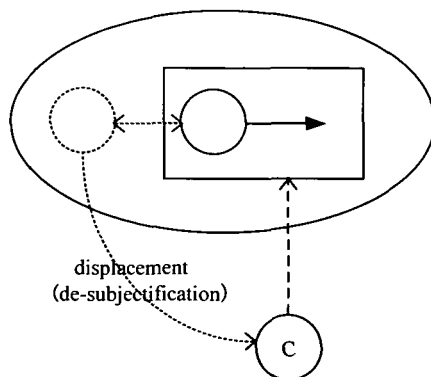
① 両向きの二重線矢印：身体的インタラクション  
(e.g. 地球上のCと太陽との位置的インタラクション)

② 破線矢印：認知プロセス (e.g. 視覚や視線の移動)

③ 四角：認知プロセスによって構築される認知像  
(e.g. 太陽の上昇)

(中村 2009: 359)

Figure 2: I-mode



(ibid.: 363)

Figure 3: D-mode

中村(2009)はこのような認知的対立は、日本語と英語の構文的特徴にきわめて対照的に反映されているとして、23項目の対立を挙げて詳述し、非常に説得力のある議論をしている。そしてここで、この2つの認知モードの視点から類別詞を考える場合、特に注目したいのは次に挙げる対立である。

(12) 参照点型認知（Iモード）かトラジェクター・ランドマーク型認知（Dモード）か

(中村 2009: 365)

つまり、日本語ようにIモードを強く反映する言語の場合には概念化者の事態認識は参照点型認知であり、英語のようにDモードを強く反映する言語では概念化者の事態認識はトラジェクター・ランドマーク型認知であるということである。

ここで参照点型認知というのは Langacker の提唱する認知文法の基本的な概念の1つであり、図4に示されるように「何かを目印にしてあるものを見つける」という人間の基本的な認知能力を反映した認知の仕方である。

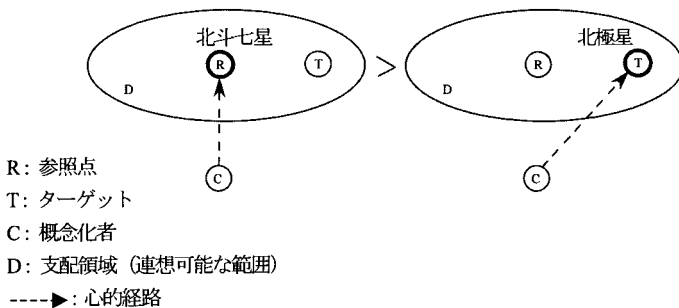


Figure 4

たとえば、次の(13)は知覚世界での現象であり、北極星を見つけるために北斗七星を参照点として利用しているのであり、(14)は概念化者が認識世界で *John* を参照点として、彼の車を同定する認知の仕方を反映している。

(13) 北斗七星 → 北極星

[北斗七星を目印（参照点(R)）として北極星(target)を見つける]

(14) John's car

R    T

また、この参照点能力に関して何が参照点になりやすいかについては一定の原理があり、Langacker(1993)は次のような「目立ちの原理(Salience principle)」を挙げている。

(15) Salience principle:

human > non-human, whole > part, concrete > abstract, visible > invisible

(Langacker 1993: 30)

つまり、人と人以外なら人の方が参照点になりやすく、全体と部分なら全体の方が参照点になりやすく、具体的なものと抽象的なものでは具体的なものの方が参照点になりやすく、また、目に見えるのと目に見えないものでは目に見えるものの方が参照点になりやすいということである。

それに対して、トラジェクター・ランドマーク型認知というのは場面の中の何かに視点をおき、それを焦点化（前景化）すると、相対的にその他の部分が背景化されるという Figure/Ground の認知メカニズムを反映した認知操作である。ここでトラジェクター(trajector(trと略記))とランドマーク(landmark(lmと略記))というのは Langacker の認知文法の用語で、トラジェクターとは事態の中で最も目立って認識される人やモノ(primary figure)のことで通常は文の主語として言語化される。また、ランドマークとは事態の中で2番目に目立って認識される人やモノ(secondary figure)であり、通常は文の目的語として言語化される。また、この Figure/Ground という前景化と背景化の認知プロセスに関して、何が Figure となりやすく、また、何が Ground となりやすいかには一定の原理があり、山梨(2004)はその要因として以下のものを挙げている。

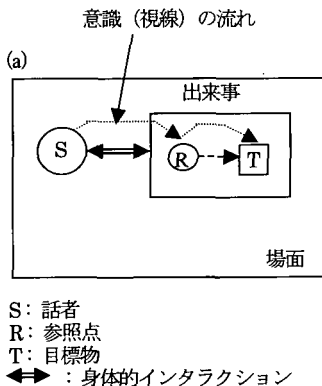
## (16) Figure/Ground の要因

- a. 小さいものが Figure/大きなものが Ground となりやすい。
- b. 動的な存在が Figure/静的な存在が Ground となりやすい。
- c. モノ的な存在が Figure/場所・空間的な存在が Ground になりやすい。
- d. 有生物が Figure/無生物が Ground になりやすい。
- e. 具体的なものが Figure/抽象的なものが Ground になりやすい。

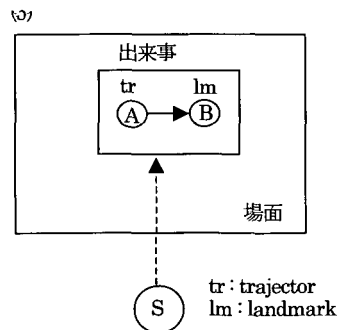
(山梨 2004: 160)

濱田(2011)では中村(2004, 2009)の主張するこの2つの認知モード（Iモード/Dモード）が言語とその言語話者の認知操作の関係を非常に自然に且つ明確に捉えており、この言語観が言語学習上も非常に有益であることから、日英語話者のそれぞれの事態の認識の違いを図5(a-b)のように図示し、また言語化に至る認知プロセスの違いを(17a-b)のように示してその妥当性を論じた。

## &lt;日本語話者の事態の認識の仕方&gt;



## &lt;英語話者の事態の認識の仕方&gt;



(濱田 2011: 75)

Figure 5

(17) 日英語話者の視点と認知プロセス

(A) 日本語話者は参照点構造で出来事を捉える。そのため、Salience principle の原理に従って出来事を言語化する。

(B) 英語話者はトラジェクター・ランドマークで出来事を捉える。そのため Figure/Ground のメカニズムに従って出来事を言語化する。

(ibid.: 76)

具体的に例を挙げると、日本語話者はある事態を言語化する場合、通常は(18a)に示されるように「場所」の表現がまず言語化され、その中に事態を位置付けるという過程を経る。これは(15)の「目立ちの原理」の「全体と部分では全体の方が参照点になりやすい」ということから「場所」が参照点として認知され、その空間にターゲットとしての事態が位置付けられるからである。それに対して英語話者の場合には、「場所」はむしろ背景であり、その中の参加者が tr/lm 認知され言語化されるので、(18b)のような表現となるのである。このことに関して更に言えば、(19a)でも認知プロセスは同じであり、「ジョン」を空間に見立てており、そのため「ジョンには」と言語化され、その中に「2人の子供」の存在が位置付けられている。更に、(20a)では「象は」は主語といよりはむしろ話題(トピック)であり、それを参照点として「鼻が長い」という事態が位置付けられているのである。

(18) a. 駅で花子に会ったよ。

b. I met Hanako in the station.

(19) a. ジョンには2人の子供がいる。

b. John has two children.

(20) a. 象は鼻が長い。

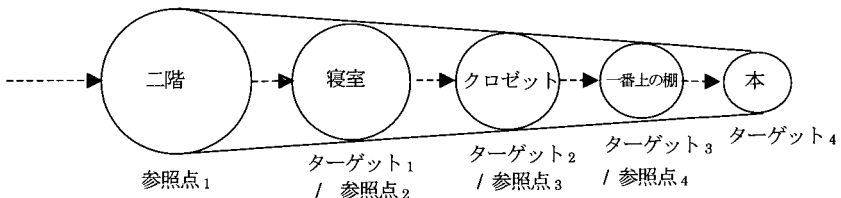
b. Elephants have long noses.

また更に、次の(21)や(22)の表現からも、日本語が参照点・ターゲット型認

知であり、英語が tr/lm 認知であることは明らかである。つまり、日本語話者の場合には「全体と部分」の関係から目立ち度の高い「全体」(北海道)を参照点とし、それを通してターゲットの「札幌」が認知され、次の段階で「札幌」が参照点として機能し、その次のターゲットである「豊平区」が認知されるといふ参照点連鎖で対象物を認知するが、英語話者の場合には場面の中で部屋(#302)をトラジェクターとして認知し、それを同定 (identify) するために修飾語句を付加していく表現方法である。

- (21) a. 北海道札幌市豊平区西岡12-25, 305号室  
 b. #302, 12-25, Nishioka, Toyohira-ku, Sapporo, Hokkaido.
- (22) a. 二階の寝室のクロゼットの一番上の棚にある本  
 b. the book on the top shelf in the closet in the bedroom upstairs.

この点に関しては、上の(22a)も全く同様であり、図6に示されるように参照点連鎖をなしている。



(ibid.: 77)

Figure 6

以上のことから、確かに日本語は参照点・ターゲット型認知であり、それに対して英語は tr/lm 型認知であることが分かる。

そこで、この視点から先に図1で見た<統合的スキーマ>と<離散的スキーマ>を考えると、参照点・ターゲット型認知では「全体の空間」が目立って認識されることから、<統合的スキーマ>認知と結びつき、それに対して

tr/lm 型認知では場面の中の特定の参加者を Figure として認識するわけであるから、＜離散的スキーマ＞認知と結び付くということになる。もっと言えば、日本語話者の場合には複数のモノの認識が＜統合的スキーマ＞でなされ、全体を1つの集合として認識するということになるので、その結果複数の成員がいても単数で言語化される（換言すれば、複数を表す体系が未発達である）と考えることができる。それに対して、英語話者の場合には複数のモノを＜離散的スキーマ＞で認識するので、個々の成員に視点がおり、そのためそれが複数形で言語化されると考えられる。

そこで次節ではこの考えを更に推し進め、類別詞の発達の動機付けについて考察し、「数をかぞえる手段」としての類別詞の発達の必然性について考察する。

### 3. 類別詞の機能

前節では、日本語が名詞の複数を表示する体系が発達しなかった一つの要因として、日本語話者の複数のモノの認識が＜統合的スキーマ＞による認知の仕方であることを述べ、このことが中村の「日本語はIモードを強く反映した言語である」という主張からも裏付けられることを主張した。そしてもしここでの議論が的外れでなければ、＜統合的スキーマ＞で認知されたモノの集合からその成員を取り出し、それを数える場合には、それを可能にする認知操作、具体的には個々のモノの存在を焦点化（前景化）する認知操作が必然的に必要となるという考え方も成り立つわけである。そこで本節では、この作業仮説を基にして類別詞の機能について考えてみる。

類別詞の本来的な機能は言うまでもなく、対象物を識別・分類することであり、これはその言語の母語話者がどのように世界を切り分けているのか、あるいは体系化しているのかということと深く結びついている。更に言えば、人間にはその基本的な認知能力の1つとして「複数の人やモノを類似性に基づいてカテゴリー化する（グループ化）する」という能力があり、類別詞はこの能力

に基づいているということができる。このことに関して、Senft (2002)は以下のように述べている。

- (23) The survival of every organism on earth depends on its ability to classify, filter, and categorize its perceptual input. As human beings, we heavily depend on these acts of classification when we try to make sense out of experience.

(Senft 2002: 690)

そして、このようにモノをカテゴリー化する類別詞がその言語社会で慣習化されると、それがその対象物を認識するための補助的役割を担うというのは当然の帰結であると考えられる。次の(24a-b)の表現が奇妙なのは「匹」あるいは「頭」という類別詞の後にくる名詞に一定の制約があるからであり、日本語話者が「匹」や「頭」に一定のイメージをもっているために、そのイメージに合わないものがその後にくると違和感をもつのである。

- (24) a. ??一匹の馬  
b. ??一頭のネコ

つまりこれは類別詞が(25)に示されるように参照点として機能しているということである。

- (25) 二匹のネコ  
R T

従って、(24a-b)不自然さは「匹」あるいは「頭」を参照点とした場合にそこから連想される範囲(dominion)の中に「馬」あるいは「ネコ」を想起し難いということに起因するということになるのである。



このように類別詞には参照点としての機能があると考えられるが、先にも述べたように、「ネコ二匹」のように類別詞が主要部の名詞に同格的に後続する場合もある。そしてこの場合には「の」格が現れないことから、この「ネコ」と「二匹」の概念構造は「二匹の」と「ネコ」の概念構造とは異なっていると考えるのが自然である。そこで、「二匹」という表現そのものに着目し、日本語の類別詞が「数をかぞえる」場合にのみ現れることを考え合わせて見ると、そこから浮かび上がってくるのは、先にも述べたように＜統合的スキーマ＞で捉えられた複数のモノの集合の中から個々の成員の存在を焦点化（前景化）する認知操作に類別詞が大きな役割を担っているということなのである。ではその認知操作とはどのようなものなのかということが次に問題となるわけであるが、この議論に入る前に次節ではまず文法化の視点から類別詞について考察し、それを踏まえて日本語話者の「数をかぞえる」という認知プロセスと類別詞による認知操作の関係について明らかにしたい。

#### 4. 内容語から類別詞への文法化

前節では類別詞がモノのカテゴリー化と深く関係していることを述べた。そこで、この節ではモノのカテゴリー化という視点から日本語の類別詞について更に考察を深めたい。

ここでは、まず議論の出発点として Lakoff(1987) 以下の主張が重要である。

- (26) It is common for the grammars of languages to mark certain conceptual categories. Inasmuch as language is a part of cognition in general — and a major part at that — conceptual categories marked by the grammars of the languages are important in understanding the nature of cognitive categories in general. Classifier languages — languages where nouns are marked as being members of certain categories — are among the richest sources of data that we have concerning the structure of

conceptual categories as they are revealed through language.

(Lakoff 1987: 91-92)

つまり、類別詞を文法体系の一部に有している言語（類別詞言語）ではその類別詞という概念カテゴリーの性質はそれを話す人達の認知活動のあり様を知る上で重要であるということである。では日本語の類別詞は日本語話者のどのような認知操作を反映しているのだろうか。このことに関して類別詞がモノを分類するためのものであることから当然言えることは、人間が何かを識別するときには、その対象物の特徴的な、あるいは弁別的な要素に着目するというのはよくあることであり、人間は一般にこうした基本的な認知能力を活性化してモノをカテゴリー化するということである。そこでこの視点から類別詞を観察してみると、次の(27a-b)では、「鳥」はそれを他の生物から区別する弁別的な特徴が「羽」であり、「魚」の場合は「尾」であるといえる。そしてこの「羽」や「尾」という弁別の特徴が「鳥」や「魚」全体を指すというメトニミーによる意味拡張を経て文法化していくことで、鳥一般、あるいは魚一般を表す概念カテゴリーとなり、その結果、類別詞として用いられるようになったと考えることができる。

(27) a. 二羽の鳥

b. 魚三尾

また、次の(28)の表現では「箆筥」や「長持」をかつぐ道具として「竿」が使われていたことから、その竿で箆筥をかつぐ状況が認識上固定化されることで、メトニミーによる推論が強化され「竿」で「箆筥」を特徴付けることが一般化したと考えることができる。また、このメトニミーによる意味拡張という点からすると、(29)は「馬」と「頭」は全体と部分の関係であり、メトニミー解釈を経て、それが慣習化することで「頭」が「馬」等の動物の類別詞として用いられるようになったと考えられる。

(28) a. 箒筥一竿

(29) a. 馬一頭

更に、次の(30)の表現では「冊」は元々は「かきつけ、文書」という意味であり、それが「書物」「綴じられたもの」という意味に拡張され、それが類別詞へと文法化したものであることから、「冊」と「本」は上位概念と下位概念の関係であり、「全体と部分」の関係になっていると考えることができる。

(30) a. 一冊の本

このように類別詞は元々はその対象物の一部を表す語であったり、また、それと関係の深いモノを表す語であったものが文法化したものであり、その文法化の動機付けには人間の基本的な認知能力である「参照点・ターゲット認知」やそれを反映したメトニミーという現象が深く関わっていることが分かる。日本語の類別詞のすべてが内容語がメトニミーによる意味拡張を経て文法化したものであるかどうかは更に個々の事例を詳細に分析する必要があるが、この過程が類別詞の発達の重要な要因であることは確かである。そして、このように元々は内容語であったものが文法化されて機能語化することで類別詞へと発達し、概念カテゴリーを表すようになったということは、類別詞は抽象的概念を表しており、それに属する成員のタイプを表しているということになる。つまり、「二匹のネコ」を例に取ると、「匹」と「ネコ」の関係はタイプとその具現形の関係になっているということである。従って、2節での議論を踏まえると「匹」と「ネコ」の関係は「参照点とターゲット」の関係であると同時に「タイプと具現形」の関係でもあるわけである。そこで、このことから日本語の類別詞の認知構造を図示すると図7のようになる。

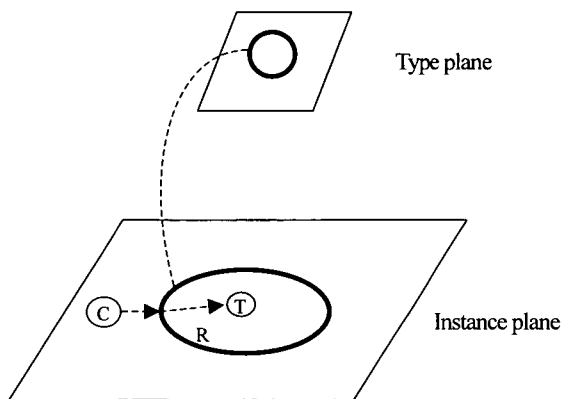


Figure 7

図7の下図は類別詞が参照点機能を担っていることを表しており、「匹」が参照点で「ネコ」がターゲットである。また、上図は文法化されて機能語となった類別詞が上位概念としてタイプを表すことを示したものである。また、下図の参照点としての「匹」が上図の「匹」のタイプと破線で結び付けられているのは、元々はモノの弁別的特徴を表す語が文法化して機能語となった類別詞が参照点とタイプの二重の機能を担っているためである。もっと言えば、参照点としての目印が慣習化してそのもので個体を表すという認識が生じてくることはよくあり、これがメトニミーと呼ばれる現象なのだが、日本語の類別詞の場合には、元々はモノの弁別的特徴を表す語がそのカテゴリーを表す機能語となり、文法化が更に進むことでカテゴリーのタイプとして認識されるに至ったということである。つまり、類別詞はある特定のモノのタイプを表す容器のようなものであるということである。具体的に言えば、「匹」と「ネコ」の関係は「上位概念としてのタイプとしての匹」と「その具現形としてのネコ」の関係であり、日本語話者が「ネコを数える」という認知プロセスでは、上位概念であるタイプを参照することで集合の中のネコを焦点化する、言い換えると、そのタイプの容器に具現形を入れることで数を数えるという認知操作をとるということである。

そこで次節では、この考え方を更に推し進めて、日本語話者がモノを数えるという認知プロセス全体について明らかにしたい。もっと言えば、次節での議論は先にも述べたように、井上(1998)が日本語の名詞はすべて物質名詞であり、類別詞を付加して始めて物体として認識できるという説と今井(2010)の日本語話者はモノと物質の本質的な違いを理解できているという主張の橋渡しとなるものであるとも言える。

## 5. モノを数える概念操作と類別詞

ここで改めて、そもそもなぜ日本語が類別詞言語として発達してきたのか、換言すれば、日本語が類別詞でモノをカテゴリー化ようになった動機付けは何かを考えてみると、そこには日本語話者と対象物との関わり方が関係していると考えられる。具体的に言えば、このことは日本語話者が図8に示されるように、デフォルトとして中村の主張するIモードでモノや事態を認識することによって起因しているということである。つまり、Iモードでは記述対象の実体と直接的・身体的にインタラクションする認知過程が概念化の過程に含まれるので、その実体との直接の対峙という直接経験がその実体を、それが何であるかということと一緒に、その実体の形や大きさ、あるいは材質で認識するという認知操作が知覚経験上必然的に伴うことになるのである。そして、この認識の仕方が習慣化することで、実体を形や大きさの側面から捉えるという認識パターンが形成され、これが類別詞の発達を促進させることを動機付けた一要因であると考えることができる。

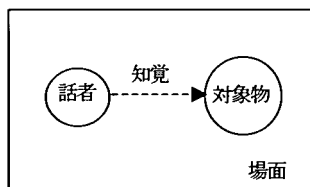


Figure 8

このように類別詞が対象物との直接的なインタラクションを必要とし、従って知覚作用を必然的に伴うということは次の Allan(1977)の(31)の主張とも一致する。

- (31) To say that a classifier has meaning is to say that it indicates the perceived characteristics of the entities which it classifies; in other words, classifiers are linguistic correlates to perception, and when the perception of a given object changes, the classifier may change concomitantly — though there are constraints on how this may come about.

(Allan 1977: 308)

また、この I モード認知で対象物や事態を捉えようとする場合には「参照点・ターゲット型認知」が基本であり、このことから日本語話者がモノの集合を認識する場合に＜統合的スキーマ＞でそれを捉えやすいということや類別詞でモノをカテゴリー化するということも自然に説明がつくことは先にも述べた。そしてこのことと、日本語では「類別詞がモノを数える文脈でしか使われない」ということを考え合わせることで、日本語話者が類別詞を用いてモノにアクセスする認知プロセスが明らかになる。

そこで、次の表現を考えてみる。

- (32) 部屋に沢山のネコがいる。

この(32)の表現は概念化者が知覚世界でネコの集合を認識して言語化したものであるが、このとき、「ネコ」それ自体は bounded entity であり可算名詞であるが、概念化者は個々のネコに焦点はなくむしろその数の多さに意識が向けられている。つまり、図 9 に示されるような＜統合的スキーマ＞による認識である。

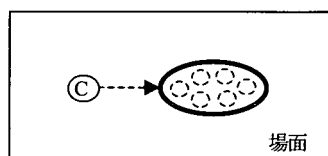


Figure 9

では、次の表現はどのような認知プロセスを経ているのだろうか。

(33) この部屋には10匹のネコがいる。

ここで(32)と(33)の表現の大きな違いは「数える」という認知プロセスが関わるか否かということである。そして、(33)の「10匹のネコ」というように集合の成員を数えるという認知プロセスでは、(32)にはないもう一つの認知操作が必要である。この「数える」という認知操作には繰り返し述べてきたように個々の成員を焦点化（前景化）するという認知操作が必要であり、ここに類別詞の存在が必要となってくるのである。つまり、日本語の場合には集合の中の成員を焦点化する手段としてそれが属する概念カテゴリーに言及するということである。<sup>3</sup> 図10は「一匹」、「二匹」と数える認知プロセスを図示したものであり、一番下の層が知覚世界を表し、真ん中の層は概念世界を表し、そして一番上の層はタイプを表している。

<sup>3</sup> 日本語のこのような特徴は次のような表現にも表れている。

(i) ○○会社の田中です。

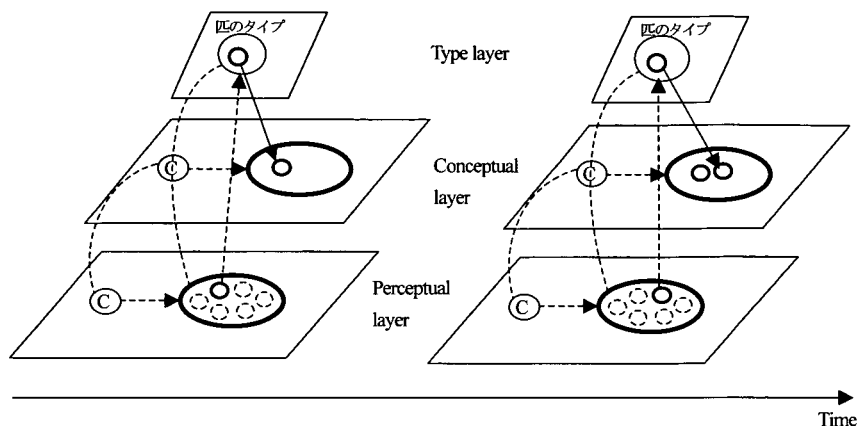


Figure 10

このとき、「数える」という認知プロセスでは「匹」それ自体は概念カテゴリーとしてタイプを表しているの、それが複数形になることはあり得ない。また、「一匹」、「二匹」と数えるという概念操作は概念化者の概念世界で行われ、「一匹目のネコ」を処理した後に「二匹目のネコ」に意識を移行し、それを数える段階では「一匹目のネコ」が処理済みとして意識内には存在するので、「数える」という認知処理は累積的な処理となるのである。つまり、この認知操作では数えているのは一匹ずつであり、この「数えあげ」が概念空間上で累積されていくので「一匹目」の次は「二匹目」というように数字だけが増えていくのである。このような累積的な処理は我々の日常的な経験上よくあることであり、次の(34)のような表現もそうである。

(34) この電話帳はだんだん厚くなっている。

つまり、発話時に見えているのは図11の破線の四角で囲まれた眼前にある電話帳であるが、これが「厚くなっている」と分かるのは、この図に示されるように概念世界(conceptual layer)で2年前の電話帳の厚さから現在の電話帳の厚さまでを累積的に処理しているからなのである。



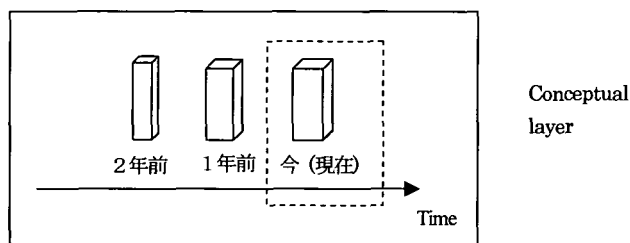


Figure 11

厳密には「厚さが厚くなる」ということと「数が増えていく」ということはそこに関与する概念操作は異なっているが、概念世界で累積的な処理をするという点は共通しているわけである。

上では、日本語話者のモノを「数える」認知プロセスについて述べた。この認知操作と先に図7で示した類別詞の参照点機能を考え合わせることで、先に問題として残っていた「二匹のネコ」と「ネコ二匹」の認知プロセスの違いが明らかになる。つまり、「二匹のネコ」という表現では匹のタイプを参照することで集合の中の成員を焦点化（前景化）するという認知操作と「二匹の」が「ネコ」の参照点となっているという二重の認知プロセスが関わっているが、「ネコ二匹」という表現では「匹」は参照点としては機能していないということである。もっと言えば、「ネコ二匹」の「匹」は「二匹のネコ」の「匹」よりも文法化が進んでいると言えるわけである。

## 6. まとめ

小稿では日本語の類別詞について考察し、それが発達した理由が日本語話者の事態認識と密接に関係しており、中村(2004, 2009)の主張するIモード認知という考え方から自然に説明できることを述べた。つまり、Iモードを強く反映している日本語ではモノの集合は＜統合的スキーマ＞で捉えられるため、その中の個々の成員を数えるためにはそれを焦点化（前景化）するという認知操作が必要であり、そのために類別詞を発達させる必要があったわけである。

ここで、これまでの議論から日本語話者のモノの認識の仕方とそれを数えるという認知プロセスがどのような認知操作を経ているのかをまとめると、まず第1段階は日本語話者は対象物と直接的・身体的にインタラクションすることで、その対象物それ自体の認識と同時にその対象物の「形」や「大きさ」等を認識し、そうした特徴に基づきその対象物をカテゴリー化するというのである。つまり、「匹」「頭」「本」「冊」等のグループのどれに属するのかを認識するということで、その際、日本語話者の場合にはこのカテゴリー化の認知プロセスが慣習化されており、対象物と概念カテゴリー認識が同時に未分化であり、対で認識されるので、概念カテゴリーが対象物を想起する参照点として機能するというのは自然な帰結である (e.g. 二匹のネコ)。また、類別詞は内容語が文法化して機能語となったものであり、そのためタイプを表しているのも、類別詞と対象物の関係はタイプとその具現形の関係として認識され、その結果、類別詞はカテゴリーを表すと同時にタイプでもあるということが日本語の類別詞の大きな特徴であると言える。このことに加えて、日本語話者の事態認識はIモードを強く反映し、「参照点・ターゲット型認知」で事態を把握するので、複数のモノの集合の場合には「全体」と「部分」では「全体」の方が目立って認識されやすいために<統合的スキーマ>で集合を認知するので、その個々の成員を数えるという認知プロセスでは、その個々の成員を焦点化（前景化）するという認知操作が必要となる。そこで、一般に集合の中のモノを焦点化する場合、その所属（カテゴリー）で同定することはよくあることであり、日本語では類別詞は概念カテゴリーであると同時にタイプを表しているのも、その対象物はタイプによって同定されると言っても認識上同じであり、このように対象物がそのタイプによって同定するという認知操作によって、その対象物が個別化され、焦点化（前景化）されるわけである。

小稿では類別詞という視点から日本人のモノの認識について考察してきた。ここで扱った類別詞は数も限られており、また、その発達過程でのメトニミーの重要性についても更に多くの類別詞の分析が必要であるが、このことは今後の課題としたい。

## 参考文献

- Aikhenvald, Alexandra, Y. 2003. *Classifiers A Typology of Noun Categorization Devices*. Oxford University Press.
- Allan, Keith. 1977. "Classifiers." *Language*, Vol. 53:285-309.
- 安藤貞夫. 2002. 『英語史入門』 東京：開拓社.
- Becker, Alton L. 1975. "A Linguistic Image of Nature:The Burmese Numerative Classifier System." *Linguistics*, Vol 165:109-121.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press.
- 濱田英人. 2011. 「言語と認知 — 日英語話者の出来事認識の違いと言語表現」『函館英文学』第50号, 65-99. 函館英語英文学会.
- Hopper, Paul J., and Traugott, Elizabeth Closs. 2003. *Grammaticalization*. Second Edition. Cambridge University Press.
- 今井むつみ. 2010. 『ことばと思考』 東京：岩波新書.
- 井上京子. 1998. 『もし「右」や「左」がなかったら 言語人類学への招待』 大修館書店.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4. 1-38.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. (Cognitive Linguistics Research 14.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 松本 曜. 1991. 「日本語類別詞の意味構造と体系」『言語研究』99 : 82-106.
- Matumoto, Yo. 1996. "Subjective-Change Expressions in Japanese and their Cognitive and Linguistic Bases." In: Gilles Fauconnier and Eve E. Sweetser (eds.) *Spaces, Worlds, and Grammar*, 124-156. Chicago: University of Chicago Press.
- 中村芳久 編 2004. 『認知文法論Ⅱ』 東京：大修館書店.
- 中村芳久. 2009. 「認知モードの射程」『「内」と「外」の言語学』353-393, 東京：開拓社.
- Senft, Gunter. 2007. "Nominal Classification." *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*, 676-696. Oxford University Press.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京：くろしお出版.
- 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』 東京：開拓社.